二〇二三年度　倉敷芸術科学大学　一般選抜

中期

〔国語〕

一、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

法と道徳とのあいだには、常識で考えても、非常に密接な関連が存在する。法規範の中でも重要なものは、しばしば道徳的な内容をもっている。特に、窃盗、[a]サギ、放火、殺人のような反道徳的な行為に対する刑罰を規定する刑法や、市民として当然なすべき行為（たとえば、［　X　］親が幼い子を扶養するなど）、またはしてはならない行為（たとえば、［　Y　］夫が妻を虐待するなど）、についての規定をふくむ民法などにおいては、その背後にある道徳的な価値判断が、だれにでもよくわかるばあいが多い。

法と道徳とのこのような結合は、双方にとって有益である。まず、法の側から眺めてみよう。法は、究極においては国家権力による物理的な強制を背景とするものであるが、単なる力だけで人々に法を守らせることはむずかしい。法が大多数の人によって遵守（じゅんしゅ）されているばあいには、大抵、社会一般に通用する道徳的な観念がそれをいわばうらうちしているのであり、逆にいえば、このようなうらうちが欠けているときには、法が現実には多くの人によって破られていることが多い。

実際上ほとんど守られていない法を、「実効性のない法」とよぶが、このような法の例として特に著名なのは、アメリカ合衆国の禁酒法や、第二次大戦中から戦後にかけてわが国に施行された食糧管理法などであろう。前者はあまり守られないまま廃止され、後者も、戦後いちじるしく空文化してしまった。特に食糧管理法のばあい、敗戦によって、戦時中の「欲しがりません、勝つまでは」という、緊張した道義感が一挙に[b]ホウカイしてから、急に実効性が低下したということは、法と道徳との関係の一端を示すケースとして興味ふかいところである。

道徳の立場から見ても、法とのむすびつきは非常に役に立つ。道徳規範は、その実効性（つまり、実際に守られること）をいろいろな社会的因子に負うている。その中でもっとも基本的なのは、正常な人間が子供のときから道徳規範を守るようにしつけられるということである。

しかし、これだけでは必ずしも十分でなく、[1]「心の欲するところに従いて矩（のり）を踰（こ）えず」という孔子のような人物は、そうざらにいるものではない。そこで、いろいろな制裁によって、人々が道徳規範から逸脱することを防止する必要がある。こういう制裁としては、社会的[c]チョウショウ、非難、社交的および経済的ボイコット（「村八分」もその一種である）など、いろいろなものがあるが、やはりいざというときにもっとも頼りになるのは国家権力の強制的介入であり、これは法の[d]リョウイキである。

国家権力による強制は、「切り札」として、最後のぎりぎりのところで出てくるのが普通であるが、このことは、法と道徳のむすびつきが、全面的なものでなく、部分的なものであることを示す。すなわち、道徳規範の中にも、法による（つまり国家権力による）強制にいわば「なじむ」ものと、そうでないものとがある。「殺すなかれ」、「盗むなかれ」、「［　1　］」などは前者であり、「屋漏（おくろう）に恥じざれ」、「［　2　］」などは後者に属する。また、「［　3　］」という道徳規範などは、現代の各国の法において、部分的に強制とむすびつけられている。また「［　4　］」という規範は、各国の法制度によって、あつかいがことなる道徳規範の例であり、日本でも、以前は妻の姦通が刑法上罰せられたが、戦後の改正で、姦通は刑罰の対象とはならなくなった。ただし、民法では裁判上の[e]リコン原因としての意味をやはりもっている。

右に述べたように、法も道徳も、それぞれの実効性を高めるために、たがいに結合するが、[2]両者の性格上の差異のゆえに、この結合は全面的なものとはなりえない。「法は道徳の最小限である」といわれるのは、この意味においてである。

（碧海純一『法と社会』による）

問一、波線部a～eのカタカナを、漢字に改めよ。

問二、空欄［　X　］［　Y　］に入る文を次の中から二つずつ選び、記号で記せ。

ア　かくれた欠点のある品物をひとに売りつける、　イ　ぜいたくに暮らす、

ウ　商品の買主が代金を払う、　エ　工事を請け負った建築業者が期日までに工事を完成する、

オ　過失によって他人に損害を与える、　カ　良い友人を紹介する、

問三、傍線部1「心の欲するところに従いて矩を踰えず」とはどのような意味か、前後の文脈も参考にしながら、記せ。

問四、空欄［　1　］～［　4　］に入る文を次の中から一つずつ選び、記号で記せ。

ア　汝の隣人を愛せよ　イ　姦淫（かんいん）するなかれ　ウ　他人の悪口をいうな　エ　借金はかえせ

問五、傍線部2「両者の性格上の差異」とは何か、わかりやすく説明せよ。

（裏面につづく）

二、次の文章Aはある文学作品の抜粋であり、文章Bはその文学作品に関する解説である。この2つの文章を読んで、後の設問に答えよ。

文章A

時子は、母屋[a]にいとまを告げて、もう薄暗くなった、雑草のしげるにまかせ、荒れ果てた広い庭を、彼女達夫婦の住家である離れ座敷の方へ歩きながら、いまし方も、母屋の主人の予備少将から云われた、いつもの極り切った褒め言葉を、誠に変てこな気持で、彼女の一番嫌いな茄子の鴫焼を、（　A　）と噛んだあとの味で、思出していた。

「須永中尉（予備少将は、今でも、あの人間だか何だか分からない様な癈兵を、滑稽[b]にも、昔のいかめしい肩書で呼ぶのである）の忠烈は、云うまでもなく我陸軍の誇りじゃが、それはもう世に知れ渡っておることだ。だが、お前さんの貞節は、あの癈人を三年の年月少しだって厭な顔を見せるではなく、自分の慾をすっかり捨ててしまって、親切に世話をしている。女房として当り前のことだと云ってしまえばそれまでじゃが、出来ないことだ。わしは、全く感心していますよ。今の世の美談だと思っています。だが、まだまだ先の長い話じゃ。どうか気を変えないで面倒を見て上げて下さいよ」

鷲尾老少将は、顔を合わせる度毎に、それを一寸でも云わないでは気が済まぬという様に、極り切って、彼の昔の部下であった、そして今では彼の厄介者[c]である所の、須永癈中尉とその妻を褒めちぎるのであった。時子は、それを聞くのが、今云った茄子の鴫焼の味だものだから、なるべく主人の老少将に逢わぬ様、留守を窺っては、それでも終日物も云わぬ不具者と差向いでばかりいることも出来ぬので、奥さんや娘さんの所へ、話込みに行き行きするのであった。

（中略）

その机の前には、メリンス友禅の蒲団[d]を括りつけた、新案特許何とか式坐椅子というものが置いてあったが、その上は空っぽで、そこからずっと離れた畳[e]の上に、一種異様の物体が転がっていた。その物は、古びた大島銘仙の着物を着ているには相違ないのだが、それは、着ているというよりも包まれていると云った方が、或はそこに大島銘仙の大きな風呂敷包が放り出してあると云った方が、当っている様なまことに変てこな感じのものであった。そして、その風呂敷包の隅から、にゅッと人間の首が突き出ていて、それが、米搗ばったみたいに、或は奇妙な自動器械の様に、（　B　）、（　B　）畳を叩いているのだ。叩くにしたがって、大きな風呂敷包全体が、反動で、少しずつ位置を変えているのだ。

「そんなに癇癪起すもんじゃないわ、何ですのよ。これ？」

時子はそう云って、手で御飯をたべる真似をして見せた。

「そうでもないの。じゃ、これ？」

彼女はもう一つのある恰好をして見せた。併し、口の利けない彼女の夫は、一々首を横に振って、又しても、やけに（　B　）（　B　）と畳に頭をぶッつけている。砲弾の破片の為に、顔全体が見る影もなく損われていた。左の耳たぶはまるでとれてしまって、小さな黒い穴が、僅かにその痕跡を残しているに過ぎず、同じく左の口辺から頬の上を斜に目の下の所まで、縫い合わせた様な、大きなひッつりが出来ている。右の蟀谷から頭部にかけて、醜い傷痕が這い上っている。喉の所がぐいと抉った様に窪んで鼻も口も元の形を留めてはいない。そのまるでお化みたいな顔面の内で、僅かに完全なのは、周囲の醜さに引かえて、こればかりは無心の子供のそれの様に、涼しくつぶらな両眼であったが、それが今、（　C　）といらだたしく瞬いているのだった。（江戸川乱歩「芋虫」による）

文章B

「芋虫」（『新青年』一九二九年一月）は、雑誌『改造』からの依頼を受けた江戸川乱歩が、同誌への掲載を前提に書きあげた作品である。この年の乱歩は「芋虫」を含めわずか三篇しか小説を書いておらず、自身もこの作品を「力作」と評価している。だが、「反軍国主義の上に金鵄勲章を軽蔑するような文章」[1]があったため、「当時左翼的な評論などで政府から特別に睨まれていた改造社」は掲載を見合わせる。原稿は「娯楽雑誌」（以上、江戸川乱歩「「芋虫」のこと」『探偵小説三十年』岩谷書店、一九五四年一一月）の『新青年』に廻され、タイトルを「悪夢」に変更するとともに、合計一四箇所の伏字を施して活字化される。

さらに、戦争が烈しくなり国家総動員体制が強化されるにつれて、「芋虫」はその内容があらためて問題視され、初出から十年以上を経て全文削除となる。この処分がきっかけとなって、戦時中、乱歩作品はすべて重版が不可能になる。初期の乱歩は数多くの怪奇小説を書き、そのグロテスクな描写がたびたび物議を醸しているが、「芋虫」の場合は、文芸総合雑誌への進出を狙って書いた「力作」が、戦時下の社会状況のなかで徐々に自身の作家生活を危うくしていったという意味で特異な作品だといえる。

だが、不遇はそれだけに留まらない。当時、隆盛を極めていたプロレタリア文学陣営は、この作品を反戦小説として評価し、左翼言説との接続をもくろむのである。のちにそのことを回顧した乱歩は、「芋虫」は「レジスタンスやイディオロギーの為に書いたものではない」と反論し、自分が描こうとしたのは「極端な苦痛と快楽と惨劇」であり、「強いて云えば、あれには「物のあわれ」というようなものも含まれていた」（『探偵小説三十年』前出）と主張しているが、そこには、[2]自作の狙いを理解しないどころか自分たちに都合のよい文脈で解釈しようとする論者たちへの強い憤りが込められている。

（石川巧「江戸川乱歩『芋虫』における〝物のあわれ〟」による）

（次頁につづく）

問一、波線部a～eの読みを、ひらがなで記せ。

問二、（A）～（C）に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で記せ。ただし、同じ記号の場所には同じ言葉が入る。

ア　ばんばん　　イ　ぐにゃり　　ウ　さっくり　　エ　とんとん　　オ　ぱちぱち　　カ　きらきら

問三、文章Aを読むと、時子は鷲尾老少将に自身の行いを褒められることに居心地の悪さを感じている。それはなぜか。文章中の言葉を用いながら、七十字程度で記せ。

問四、文章B中の傍線部1「反軍国主義の上に金鵄勲章を軽蔑するような文章」について。

①文章Aのどの箇所が具体的に傍線部1「反軍国主義の上に金鵄勲章を軽蔑するような文章」に該当しそうか。抜き出せ。

②なぜその箇所が該当すると考えたのか。百字程度で説明せよ。

問五、文章B中の傍線部2「自作の狙いを理解しないどころか自分たちに都合のよい文脈で解釈しようとする論者たちへの強い憤り」について。芸術作品や科学研究においては、しばしば、自分自身の意図を離れた解釈が世間からなされてしまうことがある。もしも自分自身の作品や研究が、自分自身の意図からかけ離れた解釈をされた場合、あなたはどう対応するか。具体的な対応策やその対応策の意図について、論理的に述べよ。

二〇二三年度　倉敷芸術科学大学　一般選抜

中期（国語）

一、

問一	問二	問三	問四	問五
a	X		1	
b	Y		2	
c			3	
d			4	
e				

二、

問一	問二	問三	問四	問五
a	A		①	
b	B		②	
c	C			
d				
e				

受験地	受験番号	得点欄
		※

※は記入しないこと